

Title	CAS不安診断検査実施報告[1]
Sub Title	A research report on the results of the CAS tests (I)
Author	小川, 芳子(Ogawa, Yoshiko)
Publisher	共立薬科大学
Publication year	1977
Jtitle	共立薬科大学研究年報 (The annual report of the Kyoritsu College of Pharmacy). No.22 (1977.) ,p.106- 115
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	原報
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062898-00000022-0106

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

C A S 不安診断検査実施報告〔1〕

小川芳子

A Research Report on the Results of the CAS Tests (I)

YOSHIKO OGAWA

(Received September 30, 1977)

The CAS Test is a standard test in Japan, derived from what was invented and published by P. B. Cattele and I. H. Sheier in 1957.

The scale is widely used to make a character diagnosis of a person by knowing the degree and the kind of his anxiety. Without obtaining a correct understanding of his own character and personality, you cannot give him any effective advice according to his individuality and ability. This is a research report on the results of the CAS Tests applied as screening tests to the freshmen of a women's college in 1976 and 1977.

The percentage of the students who marked high points in their inclination to anxiety, that is, who found difficulty in controlling themselves, does not differ so markedly from that of other colleges and universities. Viewed from the inclination of character as a whole, however, there are many who feel themselves stable and enjoy satisfaction. This inclination comes, the reporter believes, from the fact that they are the students of a women's college. That they show a considerably high degree of stability in their interpersonal relation is thought to be the result of their consciousness that they have a common aim and study in the same women's college. They seem to express their emotions relatively freely among themselves and learn easily how to adapt themselves to one another.

From this observation it follows that those who marked high points in their inclination to anxiety need individual and close help or guidance, since they are more easily isolated from the group. And the aim of the CAS Test lies in finding these students and giving appropriate guidance to them.

1. 検査の目的

教育の成果をあげるために、個々の人格を正しく理解し個性と能力に応じて適切な指導をすることが望ましいことはいうまでもない。

個々の人格を理解するといつても、本学のように1学年200名をわずかに超える程度の、全大学からみれば極小規模校で実習や担任制度ときめ細い指導体制をとっていることはいえ1人の人間が1度に把握出来る能力は8名が限界ともいわれる中で必然的に眼の届かぬことが多い。

簡単なテストで個々の人格を把握する資料が得られ、ばと考るが、数多くテストは氾濫しているが一長一短でこれというものはない、又それだけ人間の心の複雑さであり、理知の光だけで神秘の影のない世界は味気ない。テストはあくまで人間のある側面を測るものであり、テスト結果の利用の難しさもある。

「動機なき犯行」とか「動機なき自殺」といわれているものにも、対象のない漫然とした不安がその因になっていることが極めて多い。不安の程度と種類をよく判別することは心の体温を計るように心の治療の基礎であるという信念から、キャテルの考案したC A S テストは不安の測定尺度 Anxiety Scale¹⁾を日本において標準化したもので、とにかく実施が容易であり多くの他大学でも新入生へのスクリーニング・テストとして採用されているので、本学でも学生全體の或いは個々の精神健康度を把握するため、さらに学生に精神衛生への関心を喚起するための一助になればと、1年生のみであるがC A S テストを実施し、2年分の検査結果が出ているのでこゝに報告する。

2. 対象と実施方法

対象者

51年度1年生 228名中222名回収（回収率 97.4%）

52年度1年生 197名中195名回収（回収率 99.0%）

回収したものはすべて有効とし除外したものはない。

実施方法

回収率を高めるため、用紙をその日のうちに回収出来る時をえらぶ。

51年度は身体検査日に検査説明と同時に、本検査実施の主旨説明、個人的秘密厳守の確約などをする。身体検査終了時にカルテと同時回収。

52年度は身体検査日に記入事項多く繁雑になるため、担任使用時間に検査時間を組み入れてその場で記入回収。

検査結果からの個人面談の呼び出しが郵便による呼び出しを用い、再度の呼び出しがしない。

3. C A S 性格検査の概略

このテストは1957年R. B. Cattele 及び, I. H. Sheier により作成された Anxiety Scall を日本において1961年園原・対馬^{1) 2)}によって標準化され市販されるようになったものであり、米国においても不安の診断に簡潔ですぐれたものとされ、日本でも多くの大学や官庁・病院でフレッシュマンスクリーニングやカウンセリングに利用され、妥当性・信頼性の高さを示す文献も多い²⁾。

キャテルは長年の研究の結果、人格の領域で重要と思われる基本的な16の性格因子を発見し、その中の5個Q₃⁽⁻⁾, C⁽⁻⁾, L, O, Q₄が不安と密接な関係を持ちこれらが結合して更に高次の包括的因子を構成していることを明らかにした。テストは質問紙法により最も適当な40項目を集めて作られている。全体としての不安得点と5個の因子得点両面から判定に役立たせよう。

それぞれの性格因子は次の5つである。

Q₃⁽⁻⁾・人格統御力の欠陥、または自我感情の発育不全 (Defective integration or lack of self-sentiment development)

Q₃⁽⁻⁾はキャテルのQ因子のマイナスの方向を示すもので、自我感情を吟味する意識や、社会的基準によって自己の行動を統御してゆこうとするモティベーションの不足を示す。すなわち、この得点の低いものは、自己統御力にとみ、高いものはそれが乏しい。このような統御力の不足が不安の原因の一つになると考えられている。

C⁽⁻⁾・自我の弱さ (Ego weakness or lack of ego strength)

キヤテルのC⁽⁻⁾は人格因子のうち、Cの強さ（自我）とマイナスの相関を持つ因子である。Cは欲求不満によって起ってきた緊張を統制し、現実にふさわしい方法で表現する能力であり、C⁽⁻⁾はその能力の不足を表わす。従ってC⁽⁻⁾得点の高いものは情緒的に不安定であり、低いものは成熟した性格を示す。この因子と不安の関係は、不安定な自我がさまざまな防衛機制を行ないながら不安を生み出してゆくとも解釈できるし、または高い不安による緊張が退行現象をひきおこし、自我の正常な発達を妨げたとも解釈されている。両者がからみあっている場合も多いだろう。

L・疑い深さ、またはパラノイド型の不安定型 (Suspiciousness or paranoid-Type insecurity)

この得点の高いものは、疑い深い、しっと心が強いなどのパラノイド的な傾向を示し、低い方は、人を信ずる、順応しやすい、などの特性を示す。パラノイド的な行動が対人関係を悪化し不安をひきおこすとも考えられ、また、不安が先にあってパラノイド的傾向がそれに対する防衛として生ずるとも考えられている。

O・罪悪感 (Guilt proneness)

無価値感、憂うつ感、罪悪感を含む因子で、その低い方向は、自信がある、順応性にとむなどという特色をもつ。フロイドの言葉でいえば、超自我の圧力によって生じた不安と解釈される。その極端な形は臨床にみられる抑うつ性の神経症などに似ている。

Q₄・欲求不満による緊張、または衝動による緊迫状態 (Frustration tension or id pressure)

この得点の高い方は、衝動による緊張感が高く興奮しやすい、怒りっぽい、神経質などの傾向を表わし、低い方は、粘液質である、落着いているなどの特色を示す。フロイドの言葉でいえば、イドの圧力によって生ずる不安の程度と解釈される。性衝動、承認への欲求、場面への恐れが関連あるものとしてあげられる。

所定の方法で施行された調査結果は、配点表により不安粗点を採点し、換算表により大学生、高校生など被検査の該当する区分表によって粗点を標準得点に換算することにより同年齢グループにおける不安の相対的位置を知る。

全体的に女子は男子より高く、年齢による不安の変動は青年期に高く、20～25才頃より下降安定し、老年期に再び高くなることが示されている。

標準得点は10段階標準得点で、粗点の度数分布を正規化し10段階に分けたもので、平均は5.5、1段階は標準偏差の1/2である。

不安得点は表1のように解釈される。

因子得点

因子得点はその人のどの面が特に問題であるかを調べる参考とし、因子得点だけを独立して診断に用立てることは、その項目数も少く、信頼度はかなり低いとみなければならぬのでさける。

精神衛生スクリーニングテストとして、新入生などに利用される場合、不安得点8～10のものはカウンセリングや心理療法、その他適当な措置をとることが望ましく、カウンセリングを心要とするものが自発的に相談室にやってくるとは限らない。自発的に不安にかられて相談に

来たものより、このテスト結果8~10のものの方が大きな問題を持っていたという例も少くない。

表1 不安得点の解釈

10	不安神経症やその他精神衛生上特に留意すべき問題がある。治療的カウンセリングや薬物治療等を必要とするものが殆どである。
9	
8	
7	不安が普通より高いので、定期的テストなどによってよく注意してゆく必要がある。カウンセリングが望ましい。
6	不安に関しては正常である。精神健康度からみて、普通の仕事にたえられる人の得点である。
5	
4	
3	精神的に特に安定している。のんびりした、モティベーションの乏しい場合もある。危険や特殊な緊張を伴う職業にもたえうる。
2	
1	

4. 検査結果

本学の51,52年度の標準得点（不安得点）は表2のとおりである。

表2 本学新入生の不安得点

不安得点	51年度		52年度	
	人 数	%	人 数	%
10	20	9.0	9	4.6
9				
8				
7	24	10.8	20	10.3
6	113	50.9	96	49.2
5				
4				
3	65	29.3	70	35.9
2				
1				

他大学の49年度のテスト結果と対比させたのが表3であり、因子得点を私立綜合C³⁾大学と比較、表4とする。

表3 本学新入生と他大学新入生の標準得点

大学別 検査人数%	標準得点	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
		10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
共 薬 51年度	222人 (100)	2 0.9	5 2.3	13 5.9	24 10.8	41 18.5	35 15.8	37 16.7	33 14.9	22 9.9	10 4.5
共 薬 52年度	195 (100)	2 1.0	2 1.0	5 2.6	20 10.3	28 14.4	31 15.9	37 19.0	33 16.9	21 10.8	16 8.2
国立総合 A大学	416	4 1.0	8 1.9	26 6.2	54 13.0	87 20.9	79 19.0	88 21.2	54 13.0	9 2.2	7 1.7
私立総合 B大学	1284	18 1.4	24 1.8	63 4.9	154 11.9	251 19.4	224 17.3	263 20.4	171 13.1	80 6.2	46 3.6
私立総合 C大学	1613	17 1.1	34 2.1	77 4.8	143 8.9	328 20.3	307 19.0	353 21.9	207 12.8	73 4.5	73 4.5

表4 因子得点

因子 大学年度別	Q ₃ (-)		C(-)		L		O		Q ₄		総合	
	総得点	平均	総得点	平均	総得点	平均	総得点	平均	総得点	平均	総得点	平均
共 薬51年度	1140	5.1	1096	4.9	1010	4.5	1063	4.8	1068	4.8	1059	4.8
共 薬52年度	1011	5.2	883	4.5	816	4.2	879	4.5	946	4.9	836	4.3
C大学49年度	8479	5.3	7402	4.6	7960	4.9	8334	5.2	8246	5.1	7856	4.9

5. 検査結果からみる共薬生全体の性格に関する考察

1) 標準得点につき、特に平均が低い。

この検査は年齢区分として平均5.5に調製されているが、共薬生の平均は51年度4.8、52年度4.3とかなり低い平均値である。標準得点が高くて問題にされる8・9・10の範疇の割合は他とそれ程格差なく、神経症傾向のあるものへのカウンセリングなどの配慮は他大学と同じように必要である。

全体として低いことは、他大学の新入生よりも薬学という学科自身には自分のいだく希望もあり何をやるかわからないという不安より期待の方が先行しているのであろう。

又不安得点1～3に占める割合が高いということは、金銭的な面で生活に恵まれ、学業成績もかなり高いものが要求されるので、これまでの生育歴の中で特別の苦もなく、のんびりと生活してきた人々が多いといえよう。

全体の得点が低いだけに高得点を出している人々への援助、指導がより必要といえよう。

高学年で調査すると薬あるいはその関係する制度と、学校の教育に対する不満などから高得点が出るのではなかろうか。

2) 因子得点に関して L が低い（対人関係に不安定）、O が低い（罪悪感が少い）

各因子得点に対して比較出来る資料が、C大学しかないがC大学は不安得点が他より低い方で本学に近い面も持っていると思われる所以比較対象になりえると思われる。

しが低いことは対人関係に強い安定性のあることで、同じ目的に向う集団として安定性の高いことはうなずけよう。

全体的に素直な性格を持ち順応性の高いことは、これまでの生育途上に自分で物事を判断し自立するよりは、他から与えられた軌道上を歩くことが最上という倫理を自らの中に重み積ねてきた人々でもあり、多くのここの卒業生はこのまま素直な女性として生活を送れる恵まれた集団でもある。

Oが低いことは一般的に女性の方が罪悪感が強いので修正点として換算してあるが、男女差がなくなってきた点ではなかろうか。51, 52年と学年による差も出ているので、C大学は49年のものであり、3) でもう1度考える。

3) 学年間での相違 51年より52年が全体に低い。

全体的に不安得点が低く安定した学生が多いということであるが、これは2年だけのデータで比較するのは無謀である。しかし、罪悪感に関しては他校の比というより、時代の変化によるのではなかろうか。反社会的な行動が遊戯化されてきている現在、罪に対する意識の変化が、年代を追って起りつつあるように思われるがその一端が現われたといえよう。

反社会的な行動をし、見つかればすぐ謝る、それは一つの技法であり罪を悔るという気持は全然ない。謝られればそれ以上追求出来ない大人の手の内を心得て、自らの傷をおわぬ手段としているのであり、そのような行動がますます若年化しつつあることは多くの報告⁵⁾がなされている。

6. 不安得点8～10の個々について

不安得点に高得点を出している人々が実際に不安と思っていることはどんなことだろうか、少しでも解消させられないかという希望からまず面談をしてみることを考える。

51年度は最初でもあり、得点9・10の人々を中心に因子得点の中に9～10がある標準得点8の人を加え13名に手紙で、暇があり話をしにきてもいいと思う方は来てほしい、この位の軽い気持を伝え、10名が来室してくれた。52年には標準得点10～8の人全部で9名であったので同じような手紙で8名が来てくれた。

51年度の高不安得点者には、1年後どのような変化をしたか知りたくて、再度の検査依頼を郵送し7名が解答を持参した。

各人の標準と因子得点とを表5にしめす。それらから推測した性格特徴、実際に逢って聞いた不安の内容が表6である。

面接結果からの考察

1年後の解答をみると、かなり不安を解消している人も多いし、入学当所の一時的不安と解釈して適応するまでの時期を待てばよいとする考えもあるかもしれないが、1年後解答してくれたのは半数であり、意識して解答を低得点にすべく修正をして提出した人がないとはいえないでの、絶対的なものではないことは当然であり今後の課題もある。

一方、高得点のままの人もいる。そして低得点となった因子をみると、その殆んどが対人関係、罪悪感に対してである。一般的にこれらの因子の低いことが本学の特徴でもあったが、そ

表5 各人の標準得点と因子得点

年度 △ 因子	No.	1年後											
		Q3 ⁽⁺⁾	C ⁽⁺⁾	L	O	Q4	不安得点	Q3 ⁽⁺⁾	C ⁽⁺⁾	L	O	Q4	不安得点
51	1	10	5	5	5	9	8	7	8	4	6	9	7
	2	10	8	7	7	9	10						
	3	9	10	7	8	5	10	6	5	3	5	6	4
	4	7	8	6	8	8	9	6	4	7	5	8	7
	5	7	7	10	6	6	9	9	4	7	5	8	7
	6	10	3	8	5	9	8						
	7	7	7	5	8	9	8	9	4	9	6	7	8
	8	9	7	8	8	5	8						
	9	6	9	6	8	8	8	6	8	8	7	4	7
	10	7	8	8	9	6	9	5	4	5	3	6	4
	11	7	8	8	6	7	9						
	12	7	5	8	8	9	9	7	7	4	3	9	6
	13	9	6	7	3	9	7						
52	1	8	9	7	9	6	9						
	2	7	7	7	8	7	8						
	3	10	7	7	6	6	8						
	4	8	9	10	8	6	10						
	5	6	10	3	8	9	8						
	6	9	8	6	6	6	8						
	7	8	9	8	8	9	10						
	8	7	7	7	6	7	8						
	9	8	7	6	6	10	9						

〔注〕

Noは各年度の
高不安得点者を
表わす。

表6 性格特徴と不安内容

〔A〕51年度

No	テスト結果より	面接結果より
1	自我感情の未熟さ (欲求不満や衝動による緊迫状態)	通学時間の長さによる疲労、文化系希望 自分自身の性格に不満 適応するため努力中
2	自我の未熟さ	東京の生活に不安、医科希望 自分の意志で行動出来ない、流される不安
3	感情が整理しにくい 自我が弱い	検査時生理的イライラで現在問題ない
4	抑うつ的	理科系の学課が苦手で大変 自己表現出来る趣味は広い
5	疑い深い、パラノイド型不安定	親の意志で入学、何をやっても面白くない 友達とつき合っても空虚
6	人格統御力の欠除	あきっぽい、演劇が好き 表面には出さないが心はいつもイライラしている、満されない
7	緊張感の高さ	
8	未成熟さ、人からの批判嫌う	高校までガムシャラに頑張ってきた。(クラブにも勉強にも) 今は何もしたくない
9	自我の弱さ 罪悪感の強さ	
10	順応性のなさ 疑い深い 未成熟	母親薬剤師、昔から自分もそうなると決めていた 1人っ子、依存心強い 自分で行動出来ない、誰かに頼りたい
11	自我の弱さ しっと心強い	新しい環境に慣れない不安、1人ぼっちの感じ
12	神経質傾向	
13	未成熟による自己のコントロール不足	外向性、何でも手がける、趣味広い 胸の中にためておけない、どんどん出す 時に集々出来ず混乱する

〔B〕52年度

1	罪悪感の強さ 自我の未熟さ	完全僻強い、人から神経質といわれるが自分ではダラシないと思う、劣等感強い
2	罪悪感強い	1人で下宿の不安強い、小中学校では優等生、高校で劣等感のかたまりになり殻をかぶる、内向的になる 少しづつ自分をみつめられるようになってきている
3	自己の統御力の不足	志望校ではない 他人は神経質という、自分ではズボラだと思う 感情の起伏激しい
4	疑い深い	親の意志で入学、自分のやりたいこと出来ない不満 表面は優等生、友達に絶対内心見せない
5	自我の未熟さ	1人で下宿の不安、表面は外向的 1人になれない、自分で意志の決定が出来ない
6	自我感情調整の未熟さ	親戚に精神的欠陥者がいるので不安 人の言葉が非常に気になる 親は派手な性格というので目立つまいと努力
7	情緒不安定 緊張感の高さ	表面は優等生、完全に出来ないとイライラ激しい 希望学科ではないが周囲の状況からここで頑張らなければならない
8	神経質傾向	両親の生きがい、1人っ子 道をふみはずしては大変という緊張感が溢れる
9	感情処理能力の不足	

〔注〕表5のNoと同一人物である

の人自身の性格特徴だけから成り立つ因子より対人関係など学校に適応しているかどうかで大きく左右される因子に改善のみられる可能性のありそうな、趣味の広さなど自己を発揮できる場を持っている様な人は本人自身で不安を解消してゆける力を持つとはいえるかもしれない。

不安の内容面からみると、自分の志望動機にあわないところに入ってきた不満、地方から始めて上京、1人で生活する不安、何となく現実と期待感の不一致のような気がしたり、空虚感をあげる人が多い。これは2年間にさして差は認められないが、これを受けとめる基質面でかなり違う印象を受けた。

52年度生の中には神経質傾向というか、下宿の問題であれ、志望動機の違いであれ、それらの不安材料を持つことは困ることであり、自ら解決しなければいけないことで、一生懸命すでに努力している。優等生器質を持っている人々が多いように思われる。他人からみると非常によくやっているようにみえるが、自分では満足できないでいる。要求水準の高さとも関係しているだろうし、これまでの生育歴の中では、人から言われることは着実に完璧にこなしてきたが、大学に入ってからは自分で満足する程の成果があがりそうもない、すると不安とイライラが嵩む、自分でものを考え行動する術を身にうけていない為、他人指向の模索に右往左往する。誰か命令してくれる人を求めており呼び出しには、すぐに応じるが、自分の本心を見るることは非常につらいし、こわいので防衛し、表面的な応待をするので一度位の面談では本当の自己を見せることもないし、その場限りで終ってしまうが、少しカウンセラー側で本心をつくような衝撃を与えると非常にもりい殻でくずれてゆく人が多いのではないかと思われたし、面談後に自己をささえきれずにカウンセリングを続けざるを得ない人が2名いた。昨年度には高得点の人が全体としての数は多いにもかかわらずいなかったということも併せて、全体的な不安得点が下るなかで、高得点者への援助活動はますます必要だと云わざるを得ないだろう。

51年度に来室しなかった3人に対して連絡表をみると、それぞれ一般学生と違った経歴など他人に云いたくないのではないかと想像される様な記載事項があったので、一度の案内以上のこととはしない方がいいのでは、本人の傷にはあまり深入りしないことを原則とし、52年度にも1回だけの手紙しか出さなかった。しかし1回でも何事かとあわてた感じで来室した者が多かったのも今年の特徴であった。

7. まとめ

個々の人格を正しく理解し、個性と能力に応じた指導が出来るための一助として、不安の程度と種類を知ることで、その人の性格を判断するR. B. Cattele の考察した Anxiety Scale を日本で標準化したCASテストを、1年生のスクーリングテストとして実施し、51・52年度の結果報告である。

不安傾向に高得点を出した学生の割合は、他大学と大差ない。

しかし全体的な性格傾向としては、安定した自我を持っているものが多い。特に対人関係に安定し、罪悪感を持つことが少なく、自信を持って行動出来る人が多い。

自我感情が未熟で、自我を統御することが困難な学生も多いのだが、女子だけの単科大学ということは、ある程度の目的意識と仲間意識から対人関係が安定しており、感情をお互い同志の間で発散させ順応させてゆく術を心得えている人が多いので全体の不安得点の低下をみるのであろう。

以上の結果から、不安傾向に高得点を出した人は集団から一層隔離しやすく、個々に対するきめ細かい指導は他大学よりも必要であり、51年より52年度においてその深刻さを増している傾向もみられ、援助活動に役立てることが出来ればテストを実施する意味もより大きくなるであろう。

〔注〕

- 1) 園原太郎、対馬 忠、辻岡美延、対馬ゆき子；C A S 不安診断検査解説書、(東京心理株式会社) 1960
- 2) 対馬ゆき子；C A S の日本標準化について、教育心理学研究、Vol. 11 (2), 86~97, 1963
- 3) 大嶋尚義；性格検査の実施について、拓殖大学学生相談報告、Vol. 1 6~15, 1975
- 4) ロロ・メイ；小野泰博訳 不安の人間学 (誠信書房)
- 5) 青年心理；Vol. 1~4 (金子書房)
- 6) カレン・ホルネイ；友田不二男編、吉田笄子訳 ノイローゼ (不安・不安と敵意) (岩崎学術出版社)